

## 狼少女が言葉を覚えられなかったのは？

一九二〇年、インドのカルカッタに近い、ある村の洞穴から、狼に育てられていた二人の少女が、シング牧師の手で救い出され、それぞれ、アマラ、カマラと名付けられて、大切に育てられました。

アマラは間もなく死にましたが、カマラは、その後九年間生きていました。その詳細が、牧師の日記に書き残されています。これは、後に、有名な心理学者、アーノルド・ゲゼルによって学術的に研究され、その事実とそれに関する考察が学界に発表されました。それによって、狼少女のことが世に広く知られるようになりました。

ゲゼルの推定によりますと、九年間に四十五の言葉しか覚えられなかったのは、カマラの素質が悪かったためではなくて、人間の脳が最も成育する乳幼児期に狼に育てられたために、狼的な能力だけが育ち、人間的な能力が一つも育たなかったためだ、ということです。

初めの二年間は、人になつかず、食べ物をもらっても、部屋の隅へ運んで行って食べていました。それも手を使わず、直接口で、食べました。昼間は部屋の隅にうずくまって眠ることが多く、夜になって四つ足

で這い回りました。その時の目は輝き、遠吠えをしたということです。三年後に、やっと立って歩けるようになりましたが、それでも、急ぐ時には、やはり四つん這いになって駆け、それは死ぬまで改まらなかった、ということです。

このように、乳幼児期に身につけたことは、良かれ悪しかれ、改めにくいものなのです。まさに“三つ子の魂百まで”のことわざ通りです。従って、人間としての基本的な諸能力は、すべて乳幼児期に育てることに努めなければなりません。この時期を外したら、一生取り返しはつきません。乳幼児期の教育ほど大切なものは、他に断じてありません。